

「私はウソは申しません」

高 原 孝 生
(PRIME 所長)

「私はウソは申しません」。かつて1960年11月の衆院選挙戦中に、池田勇人首相が発した言葉である。当時には珍しくTV放送され、流行語にもなったという。池田は安保をめぐる対立分断された日本社会を修復し再統合していく役割を担い、「寛容と忍耐」「低姿勢」で60年代の高度経済成長に道筋をつけ、名を残した。

昨年の夏のこと、ある自民党総裁選候補が「正直、公正」をスローガンに掲げたところ、これでは首相への個人攻撃になると非難され、取り下げを余儀なくされた。前代未聞の出来事である。国政の上層部で、異常なことが起きている。権力が官邸に集中し、自由に異論を唱えることがはばかれるような空気が、永田町、霞ヶ関を覆っている。このことの深刻さを、私たちは認識すべきだ。

この何年か、巻頭言には憂いと怒りを綴ってきた。2012年12月に出現した右翼反動政権がここまで居座るとは、6年前には予想もつかなかった。本誌が刊行される頃、現首相は吉田茂を抜いて、戦後歴代二位の長期政権の担い手となっているだろう。

その間に壊されてしまったこの国のかたちを、一つ一つ修復するという課題が私たちの目の前にある。まず基本とすべきは、権力者のウソとゴマカシを許さないことだ。およそ長期政権には腐敗がつきものである。そして「権力は腐敗する、絶対的権力は絶対的に腐敗する」というアクトンの箴言のとおり、権力の集中はそれに拍車をかける。

まさに近年、目を覆いたいほどの国政の私物化が、次々と露呈した。国会審議や記者会見でそれを追及された責任者たちの不誠実な言い逃れと明白な虚言は、規律感覚とモラルの溶解を政治・行政にもたらし、隠蔽と改竄の悪弊が、既にこの国を土台から侵食しはじめている。

ことは国際的な信用に関わる。倫理学者シセラ・ボクは、核による共滅をいかにして避けるかを論じた著作の中で、戦争克服のために人類が共有すべき規範として、非暴力、約束を守ること、秘密をつくらないことに加え、嘘をつかないことをあげている。(A Strategy for Peace, 1989) 平気で嘘を吐く人物が権力の座にあることは、平和を脅かすのである。そして今日その波動の震源地は、日本に限られていない。

この基本に立ち返って、進行しつつある防衛政策の変貌と日米の軍事一体化、そしていま沖縄で起きている新基地建設問題をめぐって日本政府がこれまで何をおこなってきたのかを、問い返さなくてはならない。繰り返し示されてきた沖縄の民意と有識者・環境保護団体の警告にもかかわらず、政府は工事を強行している。沖縄県知事は法にもとづく対抗措置を講じつつ、政府との対話を求め続けている。意味のある対話を受け付けられないのが現政権の特徴だとしても、その姿勢は正当だ。

長きにわたる辺野古のたたかいを「個の志の集合体によって支えられた徹底的な非暴力実力闘争」と、昨春逝去された新崎盛暉先生は表現した。研究員としてつとに平和研の活動を支えてくださっていた西川潤先生もまた、昨秋に急逝された。両先生はそれぞれ、より平和な社会を求め将来を構想するという視座を持って、たゆまず私たちを鼓舞し続けてくださった。

1979年6月、日本平和学会研究大会が沖縄で開かれた。私事になるが筆者にとってこれが初めての学会参加、目を閉じればこのとき会長としてマイクの前に立つ西川先生、力強くフロアから発言する新崎先生の姿が、瞼の裏に浮かぶ。大会のテーマは「1980年代の沖縄：平和と自立、内発的発展の展望」だった。40年後の本号に新世代の研究者たちが寄せてくれた諸論稿が、どれだけ2020年代の私たちの課題を照らし出しているか、読者の批判を待ちたい。